

氏名(本籍)	えの 榎	もと 本	まさ 正	とし 敏	(神奈川県)
学位の種類	経済学博士				
学位記番号	博乙第176号				
学位授与年月日	昭和59年2月29日				
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	社会科学研究科				
学位論文題目	戦後世界経済論の構図				
主査	筑波大学教授	経済学博士	降	旗	節 雄
副査	筑波大学教授		長	尾	昭 哉
副査	筑波大学教授	経済学博士	小	林	弥 六

論 文 の 要 旨

本論文の目的は、現状分析論としての世界経済論は資本主義の世界体制問題たる南北問題の解明にその目標を置かねばならないことを論証し、併せて、その基本的論理を提示することにある。

第1章では世界経済論の目標と方法を、第2章では戦後世界経済論の基本構造を究明し、第3章では、諸家の南北問題論の批判的検討を行った。各章の内容は、次の通りである。

第1章では、宇野弘蔵博士の世界農業問題を焦点とする世界経済論と構想は、これを敷衍すれば、資本主義の帝国主義的世界体制—植民地体制崩壊の物質的基礎の解明にあり、その窮極の根拠は世界農業恐慌が植民地の農村共同体的社会関係に決定的な解体の契機を与え、大衆的貧困問題を発生させたことにあった。かくして戦後世界経済論は、独立した低開発諸国がこの大衆的貧困問題を解決するため資本主義的世界経済システムの変革を迫る、いわゆる南北問題の解明が主要目標となること、を論証した。

第2章では、国内矛盾の解決を優先して巨大重化学工業生産力を発展させた、資本主義諸国の世界経済支配の構造が、低開発諸国の大衆的貧困問題を一方では進行させながら、他方ではその解決をめざす経済開発—工業化を困難にする。だが低開発諸国の社会主義化を恐れる資本主義世界は、政治的に南の経済開発要求を拒否できないから、世界的規模での協力体制が問題になり、開発援助にはじまり既存の世界経済システムの変更までが世界的な政治問題となる。資本主義諸国の低開発国援助体制の形成からUNCTAD、さらにはNIEOの要求にいたる、世界経済体制問題の解明は、以上の低開発諸国の貧困問題の進展と工業化問題を基軸として与えられることを、論述した。世界体

制問題論としての現代世界経済論の基本構図の提示である。

第3章では、諸家の世界経済論が世界体制問題論として意識的に展開する視角を欠き、あるいは乏しいため、南北問題固有の諸問題を積極的に把握でき難い論理構造になっている事実を批判し、前二章の主張を裏付ける作業とした。

審 査 の 要 旨

現代資本主義を分析する場合に何を基準とすべきかについて、マルクス経済学はまだ統一的な結論を出すまでに至っていない。「資本論」の法則—例えば利潤率の低下法則や窮乏化法則などを基準とするもの、レーニン「帝国主義論」の概念—例えば、独占や国際カルテル、軍事化などを前提とするもの、さらに唯物史観のいわゆる生産力と生産関係規定によるものなどにわかれ、論議が展開されている。

これに対して、本論文は、宇野弘蔵博士の二論文（「世界経済論の方法と目標」、「資本主義の組織化と民主主義」）を方法的前提としながら、現代資本主義では構造的過剰人口の存在に対する体制的対応が、結局世界農業問題となって爆発せざるをえないことを明らかにし、ここに現代資本主義分析の焦点を設定すべきことを主張している。

この観点からする、大内力氏をはじめとする諸説の批判は明快であり、さらにこの方法による第二次大戦後の資本主義の位置づけとその矛盾の設定—南北問題—はきわめて説得力がある。

但し、社会主義圏の世界市場に対するインパクトによって、南北問題がいかなる影響をうけるかという点についての言及が殆ど欠落しているのは、世界経済論の構図の重要な一環を欠くものとして、問題を残すと思われる。今後この点についての研究を補足して著者の構図を完成されることを期待したい。

現代資本主義の基盤を解明し、かつその問題点の意味を明らかにすることは、マルクス経済学の有効性を立証する緊急な課題をなすが、本論文は、きわめて鮮やかな論理と事業検証をとおして、明確にこれに応えている。その分析方法は手堅く、論証は説得的であり、関連領域や既存研究に対する配慮も周到であって、筆者の分析能力と学問的蓄積とを充分評価することができる。そしてまた本研究の成果は、現代資本主義論の進展に対して、大きな貢献をなしたものと考えられる。

よって、著者は経済学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。